ネガティブな出来事と主観的 well-being の関連を調節する悲観性の効果についての日米比較文化研究

○福沢愛¹・山口勲²

(¹関西学院大学社会心理学研究センター・²東京大学大学院人文社会系研究科)

キーワード: 悲観性、主観的 well-being、階層的線形モデル (HLM)

Pessimism as a moderator of relationships between negative events and subjective well-being: A comparison between Japanese and Americans

Ai FUKUZAWA¹, and Susumu YAMAGUCHI^{2,*}

(¹Research Center for Social Psychology Kwansei Gakuin University., ²Graduate School of Humanities and Sociology, University of Tokyo)

Key Words: pessimism, subjective well-being, Hierarchical Linear Model (HLM)

目 的

日々の生活の中で、主観的 well-being を補償する悲観性の機能について、日米で比較検討した。近年、楽観性だけではなく悲観性のメリットを指摘する研究がある。たとえば、悪い結果を想像しておくことで失敗を防ぐ努力に結びつける「防衛的悲観主義」(Norem & Cantor, 1986)である。しかし、防衛的悲観を使用する人は、パフォーマンス前の不安感が高いこと (外山, 2011) や、実際に失敗を経験した場合、その次の課題への動機付けが下がり成績が悪くなることを指摘する研究もみられる (荒木, 2012)。そのため、方略としての悲観性は、特に主観的 well-being を保つ上では適応的ではないと考えられてきた。

しかしながら、悲観性には、実際に悪い出来事が起こった時の「将来の落胆」を防ぐという機能も指摘されている (Carroll et al., 2006)。従来扱われてきた悲観性は、「将来の落胆を防ぐため」の悲観性と、「失敗を防ぐ努力に結びつけるため」の悲観性が混在していると考えられる。同じ方略的な悲観であっても、悲観性の側面によっては、悪い出来事が起こった後でも主観的 well-being を保てる機能があるのではないかと予測される。

達成への悲観性を、内的要因への悲観と外的要因への悲観に分類した研究では、日本人の間では、外的要因への悲観は、達成動機という適応的な性質と正の関連を持つことが明らかになっている (福沢, 2014)。本研究では、日本人大学生とアメリカ人大学生の間で日記式調査を行い、日々経験する出来事がその日の主観的ウェルビーイングに及ぼす影響を、内的／外的要因への悲観が補償するかを検討する。外的要因への悲観が適応的な機能を持つ日本人の間では、外的要因への悲観を持つ人は、ネガティブな出来事が主観的ウェルビーイングを下げる程度が小さいのではないかと予測した。

方 法

調査協力者: 関西大学の日本人大学生 84 名 (男性 37 名・女性 47 名・平均年齢 19.87 歳) と、Maryland University のアメリカ人大学生 158 名 (男性 44 名・女性 114 名・平均年齢 19.25 歳) に調査を依頼した。

手続き: 第 1 日目に、内的／外的要因への悲観 (福沢, 2014) を測定した。第 2 日目以降は、その日の主観的 well-being (ネガティブ／ポジティブ気分) (Watson, Clark, & Tellegen, 1988)、その日のポジティブ／ネガティブな学業的出来事 (Maybery, 2003) を、6 日間繰り返し測定した。

結 果 と 考 察

HLM を用いて、一日に感じたネガティブ気分／ポジティブ

気分を Level1 の従属変数、一日に経験した、ポジティブ／ネガティブな学業的出来事を Level1 の独立変数、内的／外的要因への悲観を Level2 の独立変数とした階層的分析を行った (表 1)。

その結果、アメリカ人の間でのみ、外的要因への悲観が高い人は、一日に感じたネガティブ気分の 6 日間の平均値が高いことが分かった。更に、ある一日にネガティブな学業的出来事を経験すると、その日のネガティブ気分が高くなるという関連は日米共に見られた。しかし、日本人の間でのみ、その正の関連は、外的要因への悲観が高い人ほど弱いことが分かった。すなわち日本人の間では、外的要因への悲観は、その日のネガティブな出来事が主観的ウェルビーイングに及ぼす脅威を小さくする効果があることが分かった。

東アジア人は西欧人に比べて、外的要因をコントロールできないことに対する寛容さが高いとされている (e.g., Nisbett, 2003)。そのため、外的要因に関して悲観することは日本人にとって脅威にはならず、むしろネガティブな出来事を経験した時に主観的 well-being を補償する役割があると考えられた。

表 1. 一日のネガティブ気分を従属変数とした HLM の結果

	t 値	
	日本	アメリカ
切片(P0)	31.97 **	37.69 **
内的要因への悲観(B01)	-0.24	1.06
外的要因への悲観(B02)	0.84	2.24 *
ネガティブな学業的出来事(P1)		
切片(B10)	3.08 **	5.16 **
内的要因への悲観(B11)	-0.19	-0.85
外的要因への悲観(B12)	-2.50 *	1.68
ポジティブな学業的出来事(P2)		
切片(B20)	0.23	-1.25
内的要因への悲観(B21)	-0.52	-0.53
外的要因への悲観(B22)	-1.71 †	-1.40

* $p < .05$, ** $p < .01$, † $p < .10$

※一部の表はポスターに記載する。

引用文献

福沢 愛 (2014). 悲観性と達成動機の関連について— 内的／外的悲観の分類— 日本パーソナリティ心理学会第 23 回大会, 山梨大学.